

# アジアを 読む

7

## 感染症の十字路口 香港の宿命と対策の限界

でも香港で発生し、海外への伝染が心配されたのは記憶に新しい。

90年代後半にマレーシアで記者生活をしていたころ、新種の感染症の取材を経験した。マレー半島中部で熱病が流行し約250人が感染、うち100人あまりが死亡した。今回の新型肺炎とは比べようがないほど死亡率が高い凶暴な感染症だった。

患者に養豚農家が多いことから、豚が病気と関係しているとみた政府、医学関係者は病原のウイルスを求めて追跡した。その結果、豚の体内で増殖し、人にも感染する新種ウイルス「ニバウイルス」が原因と特定された。軍隊も動員して約100万頭の豚を処分し、マレーシアの養豚産業は大きな打撃を受けた。

その後、驚くと同時に深刻な気持ちになったのは「ニバウイルス」の本来の宿主を知った時だった。ウイルスのもともとの宿主は森林地帯の洞穴でひっそりと暮らしていたコウモリだった。

香港には植民地時代の自由放任主義の気風が色濃く残る。香港当局が今回の感染症の深刻さを認識後も、シンガポール政府がとったような徹底的な「隔離政策」を早期実施せずに対策が後手に回った背景には、個人の行動への制約を嫌う香港の土壌を過度に重視したふしがある。

残念ながら、途中経過だけを見るとシンガポールの強権的な措置に軍配を上げざるを得ない。香港政府は今回を教訓に、全体のリスクの前には個人の行動が犠牲になる場合があることを、社会に認識させる必要があるのではないかと。

香港は中国という急速な経済開発が

重症急性呼吸器症候群(SARS)という言葉が瞬時に世界に定着してしまつた。この略称を初めて見たときに浮かんだのは香港特別行政区(SAR)の名称である。略称がほぼ同じであるつえに、世界に広がったのは香港を通じてである。不謹慎ながらもこれはブラックユーモアではないかと思うと同時に、香港のイメージ低下は避けられないだろうと感じた。

広東省の仏山という街で1人の不動産業者が発病したのが昨年11月。そして今年四月初めには21地域・国にまで感染地が広がり、患者数は約3000人、死亡者も110人を超えた。グローバル化の負の面が露呈したと言っても良い。

災いしたのはこの病気の発生日点

交通ハブである香港の隣接地だつたとだろう。しかも、世界各地に住んでいる華人が親類訪問を行う春節と時期が重なつた。病気が飛び火した先は、ベトナム、カナダ、シンガポール、マレーシアなど華人がコミュニティを築いているところが目につく。香港を起点に世界に広がる華人ネットワークがウイルスというやっかいものを運ぶ伝送路の役割を果たしたのは否めない。

香港を経て世界に広がる感染症にインフルエンザがある。50年代に中国に出現し、香港を通じて日本でも猛威を振るつたアジアかぜと呼ばれたインフルエンザがその代表例である。その後、香港経由のアジアかぜの変異系に香港型という呼称をつけられてしまつた。90年代後半には鶏型インフルエン

(日経香港社 奥村幸広)